

領域番号	1902	領域略称名	和解学
研究領域名	和解学の創成-正義ある和解を求めて		
研究期間	平成29年度～令和3年度		
領域代表者名 (所属等)	浅野 豊美（早稲田大学・政治経済学術院・教授）		
領域代表者 からの報告	<p><u>(1) 研究領域の目的及び意義</u></p> <p>本領域の目的は、東アジアにおいて「過去」に由来する歴史問題がお互いの国民感情を悪化させている現状に対して、国民という集団そのものが想像されているのと同じように国民相互の和解もまた想像され得るに十分な社会的条件を分析・探求し、文化協調政策の基盤となる一貫した学問体系を構築することである。そのために、歴史問題の紛争化する構造をアジアの民主化の延長の中でとらえ、国際的議論に通用するものとして、また、国益・パワー・戦略という概念自体の底流となっている国民という社会そのものの新しさ、民主・人権という価値や国民感情における東アジアの特質に注目することで、国内と国際という次元を超えた政治の構造について、時々の政治情勢に左右されない基盤としての学知を構築することである。「和解学」創成の手法は、東アジア固有の歴史的・社会的文脈を学際的に分析・把握し、冷戦後に欧米で構築された紛争解決学および移行期正義論をその文脈に即して進化させることが中心となる。そのために、分析対象に即して五つの計画研究班（政治外交班、市民運動班、歴史家ネットワーク班、和解文化・記憶班、思想・理論班）を配置し、新しい学問としての「和解学」の体系化を試みる。東アジアの歴史的空間をふまえ、国際関係学（特にナショナリズム研究）、地域研究、思想史等の従来の学問的知見を援用しつつ、従来の学問が扱いえなかった問題を考察するのに十分な学問を学際的に創成し、歴史紛争の解決に貢献していきたい。</p>		
	<p><u>(2) 研究の進展状況及び成果の概要</u></p> <p>この2年は、和解学の学理としての確立に最大の力を置き、主に以下の取り組みを進めた。1) Top Global University Project、アメリカ日本協会 USJI、アジア未来財団、高麗大学、台湾中央研究院等の海外機関と連携し国際シンポジウムを開催した。2) 早稲田大学 SGU のグローバルアジア研究拠点と提携しながら国際和解学研究所を設立し、グローバルアジア講座（和解学講座）の企画・運営を通じて、若手研究者の育成に取り組んだ。3) 本研究のウェブサイト構築や和解学叢書（全6巻）の編纂を通じて各研究班間との連携を深め、和解学とは何かという基礎的理念について議論を重ねた。第1巻総論はまもなく出版予定で、今年度中に全巻出版予定である。こうした取り組みによって明らかになったことは、1) 東アジアの和解の困難さは、植民地責任克服の努力が官民の協力のもとでなされなかったことに由来すること、2) アジアの民主化は歴史解釈権を掌握した市民による国民統合のやり直しとして推進されたこと、3) 国民再統合が普遍的価値に依拠して推進されたがゆえに、その国民感情を共有せず異なる記憶と価値解釈を有する他国民との間に国内政治と国際政治の共振による心理的摩擦の悪循環が進んでいることである。今後は和解学叢書刊行をステップとし、国際学会設立に焦点を合わせる。そのためにも英語による成果を拡大すべく各班が領域会議を中心として結束し、新たな領域の創出に向かう。</p>		

<p>科学研究費補助金審査部会における所見</p>	<p>A (研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる)</p>
	<p>本研究領域は、冷戦後に試みられてきた紛争和解学を東アジア地域に発展的に応用することを通じ、感情、記憶、価値を鍵概念として、国民相互の和解に向けた新たな枠組みとしての「和解学」を構築することを目指している。現代社会において、この課題を研究対象とする社会的意義は疑う余地もない。この目的に向け、総括班および個々の計画研究、そして公募研究が着実に成果を挙げている点、また国際学術協力を含めてシンポジウムや研究交流を積極的に実施している点は高く評価でき、全体として研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる。</p> <p>その一方、書面評価やヒアリングを通じて、各計画研究や公募研究の研究成果をいかに有機的に結び付け、統合的な新しいパースペクティブや方法論を創出するかという課題については、なおも模索が続いているという印象を受けた。今後、領域代表者のリーダーシップの下、「和解学」をどのように具体的に構築するかという観点から、挑戦的な概念の提起や理論的枠組みの形成に力を注いでほしい。とくに、独創的かつ学際的な研究を進めるように一層の工夫を期待したい。</p> <p>また、若手研究者との共同研究および若手研究者の育成について、より精力を傾けてもらいたい。本研究領域の研究課題の公募を関係する学会等に広く周知し、学際的かつ国際的な視野から数々の若手研究者を巻き込み、新しい学術領域として新しい概念や研究方法を生み出すことを期待する。</p>